

いものであった。そして私が大笑いし、いつまでもそうした臆病ぶりを冗談のたねにしている、太宰は「いいよ、いいよおまえは強いよ。剣道三段だよ」とどこかだんだん不気嫌な意地悪な口調になることがあった。

たしかに私は剣道三段で高等学校の時はインター・ハイで優勝した経験もある。いつかなんの気なしにそのことを話すと、太宰はひどく驚いた。なるほど、剣道三段の文学青年というのは珍らしかったかもしれない。太宰はその後それを私をからかうたねにして喜んでいたが、一方かなり本気に私の腕力を畏怖していたところもあった。だから私も、なにかという「剣道三段」をふりまわして威張ってみせた。だいいち太宰は、五尺七寸（一七二センチ）そこそこでしかないのに、「大男」であることをひがんで猫背になったりしている。私は五尺九寸（一七九センチ）もあった。「だいたい、だらしがないよ、先生は」「いいよ、いいよ……」ということになるのであった。

それはいいが、私の腕力を信頼するあまりへんなことになることもあった。飲み屋などで不良じみた若い者がいたりすると、誰もなにも言わない先に「こう見えても、剣道三段でね、とても強いんだ」などと、向こうに聞えよがしに、わざわざおかみに話しかけたりするのである。いくら剣道三段でも、ほんとうは私も太宰に劣らず小心であった。太宰は、時にはありもしない私の武勇伝をデッチあげて、私をハラハラさせた。そんな時の太

宰のものの言い方は、実に下手くそで、誰が聞いてもわざとらしく、相手を挑発しているようにさえ聞こえた。

太宰の作品にますます熱中していったことはもちろんだが、それよりもさらに強く太宰という人間にひきつけられていった、というべきなのだろう。例によって、夜おそくまで酒をのんで、三鷹から太宰を送っての帰り道、上水のそばで煙草を喫おうとすると、二人ともマッチがない。「よし、借りてやろう」と、太宰はいきなり道のそばの灯りのついている二階に声をかけた。

「マッチかして下さい」

二階に人影が動いて、ちよっとの間の後に、

「本気ですか」

「ええ」

「あげますよ、ほら」

マッチをうけとめ、太宰が「ありがとう」と言う。なんともいえず、さわやかで素直なやりとりであった。

「よかったなあ……。いまの人いい人だったなあ、ねえ先生」

別

「ああ。あれは、お前、俺の立派さだよ。俺がああやると、他の人は抵抗できなくなるん

だ」

「あ、それはひどい、ひどいもんだ。その自惚さえなくなると、先生ももっといい男なんだがなあ」

「バ、バカ、バカだな、お前は」

こんなつまらぬやりとりも、嬉しくて仕方がなかったのである。

太宰にすすめられた本は、たとえ前に一度読んだことのあるものでも、ひどく新鮮になった。「君の作品には距離感がないんだ」といって読ませられたのは、アーシキンの『オネーギン』であった。「愛は許すことだ。そのことが、どういうことであるかがよくわかる」と言ってシンキウィッチの『クオ・ヴァ・ジス』をすすめられた。大正時代のアーキスト古田大次郎の『死の懺悔』をすすめられたこともあったし、そのころ出版されたばかりの、アーベルとガロアについて書いた『大数学者』という文庫本も貸してくれたこともある。これらの本を、太宰は床の間の上にある小さな本箱から出してくれた。本箱の開き扉はガラスのうしろが布張りになっていて、どんな本がなかにかわからないのだが、私などには、神秘的な気持さえおこさせる本箱だった。そうした本を次々に取り出してこれだけでなく「こういう本、先生、持ってませんか、貸して下さい」と言うと、ほとんど

必ず、その望みの本がそこから取り出されるのである。太宰は、ずいぶんよくいろいろの本を読んでいたが、部屋には、その本箱一つしかおいていない。そこには何でも入っている、そんな感じがした。太宰の新作がでるとそのそばに五、六冊つんであるのが例だったように思う。その一冊に署名し、私の名を書いたそばに「惠存」と書いて、もらうこともあった。そんなとき、私は、このうえなく幸福であり得意であった。

さすがにそのころでは、自分が太宰のいちばんの理解者であるとは自惚れてもいなかったが、太宰に愛されたいとは思っていた。できるならば、いちばん愛される弟子でありたいと思ったりした。だが、太宰が田中英光について語るときには、なんともいえない独得の親愛感があって、私は嫉妬した。また太宰が、古くからの友人の山岸外史氏や画家の阿部成氏（現・龍應）などと話をしている場所に居合わせると、そこには明確に大人のそしておたがい信頼しあった芸術家同士の世界が成立しているのであり、私などは、まったくのこされたような、やりきれない気持になってしまうのだった。けれども、その二人からも、私は、ずいぶんさまざまなことを教えられた。西荻窪の阿部氏の家にはじめて連れてゆかれた時のことは、よくおぼえている。枯れたとうもろこし畑に、どっかと坐りこんでいる大きな赤牛を描いた阿部氏の作品を見せられ（それは、私には、なんともいえず力強く、しかもはげしいロマンチックな作品に思われたのだが）それから例によって

酒になり、電燈を消したアトリエでベートーヴェンのソナタ「熱情」をレコードで聞かしてもらった。「あのごっつい顔で、ベートーヴェンがすすり泣いているんだ」と、阿部氏は言った。そして阿部氏に劣らず山岸氏の言動もまた圧倒的だったのである。じいっとひとの顔を真向から凝視して「君は、Man is Mortal」ということが、いつも頭からとれない人だね」などと独断するのも魅力的だった。「こなごなに碎け散った鏡の破片の一つ一つに、みな自分の顔がうつっている。それが自意識過剰だ。これは苦しい。だが、やはり破片は破片で鏡でしかない」と言われたこともある。『人間キリスト記』や『芥川龍之介』などの作品は、太宰の作品とはちがった意味で、私たちをゆすぶりもしたのだ。

それにしても太宰はやはり太宰だった。これらの人も私は「先生」と呼んだが、それは、太宰の場合とは明らかにちがうつもりでいたのである。

「カケごととはよせ。精神が卑しくなる」

そう太宰に言われたことがある。大学に入って広島高校出身の阿川弘之や東京高校からの千谷道雄などと、どういうものかにかに親しくなり、親しくなるとほとんど同時にいっしょに麻雀をおぼえ、みな同じ程度の下手さだけにたちまち熱中した。麻雀というと、千里の道を遠しとせず、どこにでも出かけていって、うれしがっていた。それがつい言葉にでて、太宰に真正面からたしなめられたのだ。言われるまでもなく、明け暮れ麻雀ば

かりして、どうしてもならない感じがうすうすはしていた。麻雀に遊びくらしして一年ではただの一単位も試験をとらなかつた。ところが、太宰からそう言われた次の日、もう麻雀はやめて勉強しようとかなり真剣に考えているところに、阿川が「おい、一荘どうだい」と電話をかけてきたのである。その口調がひどく甘ったれているように思われた。

「俺は、もう麻雀やめるー」

「へえ、おどかすなよ、これから行くよ」

「来るなら来い、とにかくやめるー」

言っているうちにも、気持がたかぶってきて、阿川の腑抜けたような精神を切り碎んでやりたくなった。興奮して待ちかまえていると、阿川がニヤニヤ笑いながらやってきた。その鼻先に、いきなり、このあいだ買ってきたばかりの『みづゑ』のブリュッセル特集号の『怠け者の天国』という版画の写真をつきつけてやった。例の、腹をふくらました怠け者が、木のテーブルの下にころがっている絵である。「おい、おれたちはこれだよ。この通りだ。俺はもう麻雀やめるぞ」そうでなくても気が短かく怒りっぽい阿川は、文字通り頭から火を噴くようないきおいで帰っていった。

だが、三日もしないうちに、私は、なんということもなく阿川と仲直りし、ついでに麻雀までやってしまっていた。阿川は、牌をかきまわし、つもった牌をすてながら、

「おまえねえ、おまえは太宰さんのところに行ってくると、急に威張るようになるから、いやなんだよ」

私は、黙ってニヤニヤ笑っていたが、どこか心にうずくものはあった。あれほどの決意が他愛なくくずれて、太宰の信頼を裏切っているのである。そのくせ、一方では太宰は、許してくれるのだろうと思う気持ちもないわけではなかった。太宰は、どんなことでも許してくれるだろうということを、ひそかに頼みもし甘えていたのだった。

もちろん次から次に作品を書いては、太宰のところへ持っていった。しかし一度もほめられたことはなかった。同人雑誌に発表した小説を「ずうっと読んでいって、途中ごろからちよつとよくなったな、と思ったたら、俺がまちがえて一ページよけいめくったので、ひとの作品じゃないか。こういうのを書かなくちゃいけないだよ」と言われたこともある。なんとかして、太宰に、作品をほめられたかった。一年もしないうちにあの大戦争になろうなどとはまさか思ってもみなかったが、戦争のにおいが、日ごとに濃くなってゆくのはどことなくわかった。いままでの『日支事変』だけではない、何かがはじまる。そして、いやおうなく兵隊に“とられる”、それが、私たちの大前提であり、運命であるように感じられた。そのまえに、一つだけでいい太宰にほめられるような作品を書いておきた

かった。紙の配給の関係で、文学同人雑誌などはすべて廃止されるという噂もあった。

私は、高等学校三年のときからある女性と恋愛していたが、もう一つ彼女の心の奥がつかめない気持がしてもどかしい思いをしていた。そのために何度も、東京と仙台の間を往復した。こんどこそは、彼女の心をしっかりつかんでおきたいと思って意気込んで帰るのである。彼女の勤めからの帰り道の目立たない場所を選んで、そこを通るまでは何時間も待った。私が立っているのをみると、彼女は「あー」と驚くが、嬉しそうにはしない。

「遅くなると、叱られる」というのを強引に誘い、暗い道を歩きまわり、そして接吻する。それに彼女も積極的に応えはするのだが、しかしそれだけなのだ。私があせればあせるほど「わからない……そんなことを言われたって」と黙りこんでしまうのだった。私は、いつもみたされない空しい思いで仙台から帰り、しばらくするとまた、どうしても仙台に行かなければという思いにかりたてられた。そうした恋愛の一方で、私は、平気で金で身体を売る女たちの居るところに出かけて行った。私を可愛がってくれた叔父の一周忌の前の晩に出かけて、そこから寺に行ったこともある。性欲の衝動にだらしなかった。女中に理不尽なことを強いたことが胸のどこかに黒いしこりとなって残っていたながら、それとはまた別な気持で平気でくりかえし出かけた。だから、仙台にしばしば帰ることとあわせて当然、金に困りもした。友人に借金をし、家から送ってもらい衣類を質入れし、私は

金銭にいやしくこだわる癖がついた。

私は、その一つの作品のために、こうしたすべてのことを、正直に書いておこうと思った。貧しくとも、それを私の青春の確かなしるしにしたいと思つた。そこには、やはり『東京八景』に強く動かされての発想もあったようだ。

かなり長い間かかって、ようやく書きあげたその作品を、その日のうちにすぐ私は持つていった。太宰は、「うん」とうなずいて手にとってくれたが、机の上のせたきりその場ですぐには読んでくれないのだった。しかたがなかった。いつごろ行ったら、読んでもらえているのか、あせる気持をおさえて、一週間ほど待った。

今度はたしかに読んでいてくれてはいたが、「前のよりはずつといいようだが、しかし、まだ、まだだな」と言われて、私は、なにかすうっと落ち込むような気持になっていた。「叙述的で表現になっていない」と具体的に一つ一つの文章で指摘され、やはり身体中が熱くなった。

その夜も「ちよっと……」という事になって、三鷹の「きくや」に行つたが、ずいぶんしばらくしてから、太宰が言った。

「あれは、君が恋愛している相手の人について書いたものかね」

「はあ」

「それは、よくないよ。恋愛している相手を書いちゃいけない。もし、相手の人を本当に尊敬してんだったら、書いちゃいけないんだ。書くな」

太宰は、にこりともせずまじめに言い切つた。

が、私がしょげているのが気の毒だったのだろう。すぐいつもの調子になって、

「いいか、俺は婦系図の酒井先生だ。恋愛なんかやめてしまえ。『女と切れるか、俺と切れるか』だ。おまえなんかバカだから、きつと俺と別れるなんて言い出すだろう。バカだよ。どうしても別れられないのかねえ。結婚したいだなんて、不潔だとは思わないかね。女と切れるよ。恋愛なんかやめろ」

酔うほどにバカと別れるの連続であった。同情や憐愍で結婚しようなどというのは、恋愛のヒロイズムでしかない、必ず失敗するという言葉もあった。まさか「同情や憐愍」から恋愛しているつもりはなかったが、それでも、太宰の言葉が、私の心の中のある種の危惧に妙にふれるものがあつた。しかし、一方では「バカと別れる」を連発する太宰の気持がうれしくもある。そこで、

「はあ、先生はシットしてるんだな」

「バカだな、お前はほんとうにバカな奴だよ」

というぐあいになるのだった。

その夜、太宰は、二つ讀美歌の文句を覚えてくれた。

「わがあしかよわく けはしき山路やまぢ
のぼりがたくとも ふもとにありて
たのしきしらべに たえずうたはば
ききていさみたつ ひとこそあらめ」

「わがゆくみちに はなさきかをり

のどかなれとは ねがひまつらじ」

二つとも後に、作品『正義と微笑』に書きしるされている。

ちょうど私や三田が、三鷹に通いだしたころから、さきに書いた堤重久や小山清、菊田義孝なども通いだしている。みな少しずつ気の弱いところがあり、ひたすらに太宰に傾倒していた。それまでの太宰の周囲にはなかった鬱悶気が生まれはじめていた時期のように思われる。そしてまたこれは、戦後の太宰をとりまいたムードともはつきり違っているようだ。『令嬢アユ』『ろまん燈籠』『誰』『新郎』『律子と貞子』『正義と微笑』『黄村

先生言行録』などの諸作品は、そのような鬱悶気の中から生まれてきたと言ってもよいだろう。私たちの存在は、それこそ太宰の「日頃の荒涼」をなぐさめる色どりになっているのではないか、とかなり長い間、そう思っていたものだ。

しかし、私たちはそのころの太宰の心もちについて、何ほどのことがわかっていたのだろうか。私は、『新郎』という作品の中に、次のように書いているのを、長いあいだ気づかないでいた。

「私は未だいちども、此の年少の少年たちに対して、面会を拒絶した事が無い。どんなに仕事のいそがしい時でも、あがりたまえ、と言う。けれども、いままでの『あがりたまえ』は、多分に消極的に『あがりたまえ』であったという事も、否定できない。つまり、気の弱さから、仕方なく『あがりたまえ。僕の仕事なんか、どうだっていいさ。』と淋しく笑って言っている事も、たしかにあったのである。私の仕事は、訪問客を断乎として追いつ返し得るほどの立派なものではない。その訪問客の苦惱と、私の苦惱と、どっちが深いのか、それはわからぬ。私のほうが、まだしも楽なのかも知れない。」私は、学生たちの話を聞きながら、他の事ばかり考えていた。あたりさわりの無い短い返事をして、あいまいに笑っていた」

てのことである。「学生」のときもこの作品はたしかに読んだはずだが、いったいなにを
読んでいたのだろうか。これは、自分のことではないなどと考えていたのだろうか。

太宰は、また『待つ』という作品も書いていた。これは、昭和十七年六月、博文館から
刊行された『女性』という単行本に収録されただけのきわめて短い作品で、死後全集がで
るまではただ一度しか発表されなかったものである。いつごろ書かれたのかも定かでない
のだが、これにはこうある。

「一体、私は、誰を待っているのだろうか。はっきりした形のものは何もない。ただ、もや
もやしている。けれども、私は待っている。大戦争がはじまってからは、毎日、毎日、お
買物の帰りには駅に立ち寄り、この冷いベンチに腰かけて、待っている。誰かひとり、
笑って私に声を掛ける。おお、こわい。ああ、困る。私の待っているのは、あなたでな
い。それでは一体、私は誰を待っているのだろうか。旦那さま。ちがう。恋人。ちがいま
す。お友達。いやだ。お金。まさか。亡霊。おお、いやだ。

もっとなごやかな、もっと明るい、素晴らしいもの。なんだか、わからない。たとえ
ば、春のようなもの。いや、ちがう。青葉。五月。麦畑を流れる清水。やっぱりちがう。
ああ、けれども私は待っているのです。胸を躍らせて待っているのだ。眼の前を、そろぞ
ろ人が通って行く。あれでもない、これでもない。私は買い物籠をかかえて、こまかく震

えながら一心に一心に待っているのだ」

太宰のかつて左翼非合法運動に参加し、まもなくそこから脱落した。そのことと無理に
結びつけることはないが、それにしても太宰は、なにを「待つ」ていたのだろうか。

このころの私には、少しもわからないことであった。

3

その年の九月、文学部二、三年生に対する泊りこみの軍事演習が行なわれたが、その最
中わざわざ各科の主任教授がやってきて、「三年生はにわかになにに十二月中に卒業せしめられ
ること、従って卒業論文は草稿を以て提出しても可なること」ということが通知された。
それにともない、われわれ二年生は来年六月あるいは九月に、授業を打ち切って卒業させ
られるという噂がながれた。そして、まさかと思っていたその噂が、事実となって、まも
なく大学当局から発表された。それからの時間は、あわただしくすぎた。十一月のなかば
すぎ、たしか新宿の伊勢丹の前を通っていると「おう、おう」と声をかけられ、ふりむく
と、太宰があまり気嫌のよくない顔をして立っていて「文壇は、おまえ、大変だぜ」とい
う。小石川の区役所かに、大衆作家、純文学作家、評論家をとわず、文学者がみな集めら

れて、徴用をうけるための身体検査があった。「おれは胸が悪いってハネられたけど、井伏さんは行くんだ、なんでも南方に行くらしい。バカにハリきって、名前を云うにも〇〇でありますなんて軍隊口調で言うのがいたりして、てんやわんやだった。ハネられたのは、ほんのわずかなんだ」と言うのであった。それから、まもなく開戦の十二月八日になった。平常心を失うまいと思いつながら、そのくせ一方では「大戦果」に胸を躍らせ、「大君の辺にこそ死なめと心から思う」などと日記に書きもしたのである。三田は、その年の暮、卒業と同時に故郷の岩手県花巻に帰り、翌年二月一日には、盛岡の歩兵連隊に入営させられてしまった。私は、兵隊検査で第二乙種になり、第二乙種からは予備役なので、入営しないこともありうることに期待をつないでいたが、やはり現役兵と同時に召集されることにきまった。七月末までに卒業論文を提出し、九月に試験、同二十五日に卒業式で十月一日入営という日程であった。

そのあわただしい日々のなかで、やはり私は恋愛のことを思いわずらい、麻雀をし、そしては三鷹に出かけて行った。

「太宰さんのところに行こうと思っていたのだが、今日は行けなかった。太宰さんを独占していたい。甘えたい。このごろはほんとうにだめだ。孤独か。うそを言うな。なんのために文学せねばならないのか」「太宰さんのところにゆくと、すでに阿部合成氏来てい

て、ブドー酒一升瓶で飲んでいゝ。酒不自由だろうと甲府の人からもらったとのこと。案外、うまい。西荻の阿部氏の家までついて行って、また飲み、駅前で飲み、それからオッパラワレタ。こけの一心。蟻とキリギリス。複眼を持たねばならぬ。」「太宰さんは、後世への所産として書くという。しかし、おれなどには、後世の所産ということ考えられない。いやむしろ、残らない可能性の方だけである。／無為に書く決心をした。／発表などということも、どうあっても考えられず、ささやかに片すみに生きて、片すみで死んでいった者の記録があるというだけ。それも世の人誰にも知られないですむということになるか。／人目にふれずとも仕方がない。淋しいような気もするが、書くことは義務だ。そこまでなんとかたどりつきたしと思う。／この一筋につながる、ということ。／なんじ誓うなかれ、ただ。然り、然り、否、否、とのみ言え」などということが、日記のそここに

しるされている。

すぐに九月がきて、「どうせ俺たちはみんな兵隊にとられるんだ。落第なんかさせっこないよ」と、たかをくくっていた試験も、終わった。卒業式の前、九月二十四日の夜、私や阿川や千谷、それに同じく卒業して兵隊にゆかねばならぬ二、三の者が集り、太宰と山岸氏に来てもらって、別れの会をした。私は一つおいて前の晩にも太宰をたずね、新宿で飲んでいたのであったが、その夜も新宿で、ずいぶん賑かに飲んだ。最後には、二丁目附近の

屋台店で一人一人別れの歌を歌うことになり、いやがる太宰に山岸氏が何とか彼とか無理強いすると、しぶしぶ心細い声を出しはじめた。なんと言おうか、泣くが如く嘔るが如く「みんなで腹をかかえて笑って、私は、もう心残りはないと思った。」

「揮復 どうして居られるか、いつも考えて居ります。何か、東京から送ってもらいたいものが、あったら遠慮なく、言い寄こし下さい。先日、堤が遊びに来ましたので、『おまもりは?』と聞きましたら、二十七日(?)に送りました、と言っていました。お家のほうへ、とどいている事でしょう。戸石に合う軍服があるまいから、すぐかえされるんじゃないか、などと話していましたが、男女川が以前、仙台の聯隊にはいったことがあるそうですから、その時の軍服が残っていたのかも知れない。いずれにせよ、お大事になさい。タマに死すとも病いに死ぬな、と言う言葉もある。ではまた、おたよりしましょう。不一。」

この太宰からのハガキは十月九日の日付になっている。してみると入営早々に私が心細そうなたよりを出し、すぐに太宰がこれを書いてくれたのだろう。堤は、二月一日入営したがその隊の軍医の好意(?)とかで、まもなく召集解除になった。太宰は「堤は、なんにも役に立たないというので軍隊まで鹹になった」などと例によって笑い話にしていたのだが、軍服の話や「タマに死すとも、病いに死ぬな」などというわけのわからない言葉

も、「できれば堤のように帰ればいいな」という私への慰めなのである。

だが、もちろん私は堤のようにはうまくゆかず、いやおうなく幹部候補生試験というのを受けさせられ、翌年の五月には現役兵といっしょに予備士官学校というのに送りこまれてしまった。そして、三田の戦死を知ったのはだだっ広い王城寺ヶ原という野営地で、暑いさなかのことであった。みんなで頭をよせあって読んでいた新聞の、アッツ島戦死者の名前が書きならべられている、ほとんど終わりに近いところに三田の名は、やはり、出ていた。その年二月、三田の弟からたよりがあって、三田が北の方のどこかの島に送られたらしいということは知っていた。アッツで「玉碎」という報道のあったときから、その中に三田が入っているような感がしてならなかったのだ。三田が最後に北海道の港からたつとき、家に送ってよこしたハガキには、こんな詩めいた言葉が書きつらねてあったという。

「出陣の夜である。

雪まじりの風は 黒い三本煙突に

うなっている。

星は 消えた。

三田は、「二階級特進」して、兵長になっていた。してみると彼は一等兵で、つまりは、アツツ陸軍部隊の最下級の兵隊として死んだのだった。いかにも一途できびしいところのある三田らしい死にざまであった。すぐ私は、太宰にたよりの書いた。

しかしその私も十二月には予備士官学校を卒業し、南方に送られることになった。

何人かの見習士官とともに仙台を発ったのは、昭和十九年一月七日の夜である。大阪まで直行しそこから船に乗ることになっていた。東北線から東海道線に乗りかえる間、約六時間近く自由になる時間がある。見習士官だけで部隊を編成しているのであり、うるさい上官の監督があるわけではなかった。私は、ためらわず太宰に上野駅まで来てほしいという電報をうった。私は、太宰が来てくれることを信じて疑わなかった。私たちの乗った汽車は上野駅にたしか五時半まえ、に着くことになっていたのである。三鷹からは一番電車に乗らねばならず、それに乗るためには、太宰は三時近くには起きねばならぬはずだった。しかしその時、私はそんなことを考えもしなかった。

ところが、そのころよくあったことで、途中、汽車は三時間ほど遅れた。それでも、私には太宰が居ないなどという事態はまったく考えられなかった。ただ私が気づかっていたのは、太宰の待ち合わせている場所がわからず、見つけれなかったらどうしようという

うことだけだった。「なにしろ、要領が悪いからな、先生は」と思っていた。——がやはり太宰は、いた。

太宰は、改札口のところに、二重回しのマントの袖を胸前に合わせ、寒そうな、心細そうな顔つきでしゃがんでいた。私が見つけると、太宰が気づくのは、ほとんど同時だった。太宰が「おう」と立ち上り、私は「先生、おううっ」と隊列を離れて駆けだしていった。すると、太宰はにわかになどく狼狽した表情になり、両手を制止するように前につきだしてふった。私が隊列を離れたことであわてているのだということはすぐわかった。しかしどうせ私たちには指揮官などはいないのである。私は、太宰の例によっての臆病な狼狽ぶりが、ひどくなつかしく、うれしかった。

太宰は、「おい、大丈夫か」と隊の方をちらちら気にしながら言う。「大丈夫、大丈夫、相かわらず先生は臆病でいけない。あれらは、駅前で一時自由解散というのになるだけですよ。ぼくらと同じ奴ばかりで、だれもえらいのなんか居ないんですよ」私は、軍隊生活を体験したことで、現実処理というよりな実際の点では、太宰の高みに立っているつもりになっていた。だが落ち着きをなくしていたのは私も同様である。集合場所を聞き、朝食の弁当をもらうために、太宰をそこにおいて、すぐまた部隊のあとを追ったが、その時、どういうつもりだったのか、手にさげていた軍刀を太宰におしつけて駆け出し

た。私は、腰に吊したものの外に予備の軍刀をもう一本持っていた。それは、大量生産の昭和刀というやつで、派手な紫の袋に入れてあった。しかもその袋には、これまた目もさめるばかりの真赤な太い紐がまきつけられているのである。太宰は、ただ一人、しばらくのあいだ、その紫の袋の軍刀を持たされていたわけだ。私は、まもなく、弁当を二つ持って帰った。軍隊というのは、不思議なところで、必ず「員数外」というのがある。この時も、ちょっと無理をいうとすぐ余分に一人前くれた。もちろん太宰と二人で飯をたべたいのは、何よりの望みだったが、もう世間ではかなり不自由になっていた白米だけの朝食を、すぐに才覚してくる実務家ぶりを見てもらいたいような気持もひそかにあった。

とにかく、私はひどく気負っていた。軍隊生活のさまざまな経験をつむにつれ、今度太宰にあらたら、どうしても言ってやろうと、次第に思い定めるようになっていた事があった。いつそいつを言ってやろうか、ということだけが頭にあって、太宰が、例の紫の袋をマントの袖にかくしだきかかえるようにしながら、なんとも始末のつかない表情になるのを見て、すぐ太宰の気持に察しはついたが、あえてそれを無視して、どんどん歩いていった。太宰は、三鷹で飲めるように一軒たのんできた。という。だが時間がなかった。上野公園の茶店で飲めるところを探そう、ということになった。たぶん、西郷隆盛の銅像の方へ石段を上ってゆく途中でであったと思う。

「先生、先生は生活っていうこと、どういうことだと思いますか。生活ってのはね、先生、ノオと言うことなんです。ぼくは軍隊でそれがわかった。生活なんて、なんでもないことですよ。身辺の者とのつき合いにすぎんことじゃないですか。そして、『断る』ときには、はっきり『断る』ということだったんですね。断乎、ノオですよ」

私は、太宰を叱咤激励して、そして同時に私の「成長」に感心してほしいようつもりでいたのであった。

「先生はね、テレるでしょう。だからいけないんです」
私の記憶だと、その時まで、まだ軍力の袋を太宰に持たせたままであったように思われる。

「いいよ、いいよ、おまえはえらいよ」

と、突につまらなそうな、いやな顔で言っ、太宰は軍刀を返してよこした。

私が復員して南の島から帰ってきたのは、昭和二十一年七月である。仙台も空襲を受けしたが、郊外にある私の家はさいわいに無事だった。私は、南方にたつとき、留守中に発行される太宰の単行本、小説の掲載誌などを全部買っておいでくれるように頼んであったの